

2023.5
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とよ や
富 薬

5号

第45巻
No.406



ケシ *Papaver somniferum* L.

(ミカン科 *Papaveraceae*)

- 生 薬** アヘン（阿片） 未熟果実に傷を付け、分泌する白色乳液をへらでかきとり、乾燥したもの。空気に触れると黒色を帯びた塊になる。
- 成 分** アルカロイド: morphine, codeine, papaverine, noscapine, thebaine, narceine、その他: meconic acid, meconin、脂肪油、樹脂、糖類、ペクチン、タンニン等。
- 効 能** かつては鎮痛、鎮痙、鎮咳、止瀉薬として用いられたが、習慣性があり、アヘン末として少量用いられるだけになっている。morphineなどの製薬原料。麻薬。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



原産地は明らかではありませんが、ギリシアから西南アジアと考えられています。秋播き1年生で高さ1.5mに達します。茎は太く直立し、通常上部でまばらに分枝し、葉は互生、無柄で茎を包み、長楕円形または長卵形で縁辺は欠刻状に浅裂し、歯牙を有します。茎葉共に粉白を帯びます。6-7月に茎頂に大形で白から深紅、帯紫色の花を咲かせます。果実は未熟な時は淡緑色で白粉を帯び、傷つけると催眠作用のある乳汁を分泌します。種小名*somniferum*（催眠性の）はその作用から名づけられました。熟すると黄褐色になり、風にゆすられると柱頭の子孔から小さな種子がこぼれ出ます。ケシ粒のようにと例えられるほど小さな種子ですが、発芽しないように焙煎したものをポピーシードと呼び脂肪油、ビタミン

類に富み食用として利用されます。七味唐辛子の薬味の一つとしてまたアンパンの上の粒や金平糖の核などに用いられ、搾ったケシ油は調理油に使われます。現在ではパウンドケーキやクッキーのフィリングに、サラダや料理のトッピングに、揚げ物の衣に、鶏の松風焼きに、ポピーシードクッキーなど多くの料理に使われています。食用以外には肌の保湿油、絵具や石鹼の原料として使っています。長い間栽培が行われたため品種も多く、八重咲品種で花卉が多く海外では園芸品として育てられたこともあるボタンゲシ(*var. paeoniflorum*)があります。花卉が多いが、雄しべ、雌しべを備えているため結実し、アヘンを採取できます。日本では昭和初期に蒙古気候型(*ssp. mongolicum*)の白花で果実が大きく生産効率の高い一貫種が作られました。品種名は一反当たり一貫の収量があるとして名づけられた増産主です。

メソポタミアのシュメール人はBC3000年頃にはケシを栽培し、Hul Gil（歓喜・至福をもたらす植物）と名付けていました。後に、アッシリア・バビロリアにもケシは伝えられ、アッシリア人がaratpa-palと称していたものはケシの乳液、すなわちアヘンでPapaverの語源になったと言われています。古代エジプトでは医学書『エバース古典』(BC1550)に「頭皮の皮膚病の膏薬として カバの皮膚の煮たもの、油か脂肪、ケシの種、コロシントウリを混ぜて、柔らかな塊にし、それを塗る」とあり、医療用として種子を用い、栽培が行われていたと考えられています。

ディオスコリデス(40-90)の『ギリシア本草』のMekon AgriosとMekon Emerosの二種のケシの図は、葉が茎を巻く様子や頭を垂れた蕾や果実、花が*somniferum*種に酷似しているところからほぼケシと断定しても良いものと判断されます。「ケシのなかには、栽培されているものもあり庭に植えられるものもある。その種子はパンの中に入れられ、健康時に使われる。蜂蜜とまぜてゴマの代用に使われることもある」と種子を食用に、「露がかれてから、ナイフで頭果の小星状部を切り刻むが、内部まで突き刺さないようにする。頭果側面の表面にもまっすぐな切れ込みを入れる。こうして、滲出してくる滴を指でスプーンにかき取る。…このようにして集めたものを乳鉢ですり、トローチにして保存する」と、現在のアヘンの採取法とほぼ同じ方法が記載されています。同様のことがプリニウス(23-79)の『博物誌』の「植物篇」に「栽培種のケシには三種類ある。ひとつは白いケシで、昔の人たちによると、その種子を炒ってハチミツと一緒にデザートに出していた。…二つ目のケシの種類は黒ケシで、その茎に傷をつけると乳液の汁が出てくる」と記し、「植物薬剤篇」には「黒いケシからは催眠剤が得られる。…黒ケシの先端や萼の下に切り口を入れるのがよいとされ…ケシの汁は量が多く濃いので、磨り混ぜて日影で乾かし、丸薬にする。それは催眠作用だけでなく多量に服用すると、睡眠中に死をもたらすことさえある。これはオピウム(アヘン)と呼ばれる」と、アヘンの採取法と催眠作用、危険性を説いています。

(村上守一 記)